

「環境に優しく 災害時役立つ」

県LPガス車導入



県が初めて公用車として導入したLPガス車。
車体の下にガスタンクが付いている＝県庁前

県はLPガスを燃料に使う公用車を初めて導入した。LPガス車は二酸化炭素(CO₂)や窒素酸化物(NO_x)の排出が少なく、環境に優しいとされる。燃費が良く走行可能距離も長いため、県は「燃料が確保しにくい災害時にも役立つ」と期待している。

県消防保安室によると、導入したのは、LPガスとガソリンの両方を燃料として使う乗用車。ガソリンタ

ンクとは別に、車体の下にガスの容器が付いている。ガソリンでエンジンを始動した後はLPガスで走り、ガスがなくなれば自動でガソリンに切り替わる。容量はガソリンが50リットル、LPガスが32リットル。満タンにすれば、通常の車の倍ほどに当たる約千キロを走れるという。

車両の引き渡し式が県庁前広場であり約20人が参加。県LPガス協会の山田耕司会長と、車をLPガス車に改造して納車した「エフ・ケイメカニクス」(大分市)の社員が、車の特長を県職員に説明した。

導入費用は約190万円と通常のガソリン車より40万〜50万円ほど高い。ただ、LPガスはガソリンより安価なため、走行距離が長くなれば経済的にもメリットがあるという。